〔特別展/李朝絵画によせて〕

# 韓国絵画の魅力 ―古美術界の現場から―

ソウル・孔昌画廊代表、元韓国古美術協会会長

孔（コン） 昌（チャン） 鎬（ホ）

日本には米国と同様に、韓国絵画が沢山伝存していますが、そのためか日本の学者、ディーラー、コレクターの方々は韓国絵画についても熱心に研究して作品に精通し、見る目を養っているようです。その証拠には作品に落款の無いものや民画の類にまで、広範囲にその価値を認め、優れた作品を発掘しています。

これに対し韓国では、ほとんどの人達がいわゆる三園（檀園・蕙園・吾園）や三斎（恭斎・謙斎・玄斎）など、有名な画家の作品にしか関心を寄せません。作品を見る目がないから、「目」で買わずに「耳」で買っている傾向があり、これは残念なことです。

これまで私が古美術に関わってきた中で、日本が羨ましく思われることの一つに日本には優れた表具師がいることです。修復の技術はもちろんのこと、作品が最も引き立つように様々な色合の布裂を使用するなど、長い伝統に培われた彼等の仕事振りは本当に素晴らしい。私もこれまで数多くの作品を京都の表具師に注文してきましたが、美事に甦った作品を目にするたびに彼等でなければ出来ない世界一級の技術に感動しています。

もう一つ日本との関わりのなかで有難いと思っているのは、高麗仏画や李朝初期の作品など、韓国にほとんどなかった作品が1980年代中頃から日本よりもたらされるようになったことです。特に古い時代の優れた仏画などは日本の古美術商から買ったり競売で手に入れたものですが、韓国に持ち帰ったあと、宝物（重要文化財）に指定されたものも幾点かあります。

また、仏画に限らず、これまで主に李朝時代の絵画作品を多く日本で入手しましたが、時にはいわゆる「掘出物」に出くわすこともあります。

かつて、「ある人が先代から受け継いだという檀園の山水画帖を持っているのだが、日本人の鑑定家が偽物と鑑定したために売りたくても売ることが出来ないでいるらしい」という話が耳に入りました。早速日本に出掛けていって作品を拝見すると、これがなんと立派な本物なのです。「本物は本物ですが…」と早る心を抑えたポーカーフェイスで切り出しました。この時は「偽物」という誤った鑑定が既に出されていたお陰で良い作品を大変安く入手する幸運に恵まれました。ソウルへの機中で飲んだシャンペンの何と美味しかったことか…！

鑑定というのは一瞬の勝負です。0.01秒の間にこれまでの知識と経験を総動員して真偽を判定するのです。ですから古美術を扱う人は、最高のものを食べ、最高のものを買い、最高の状態で眠りに就き、常に良い考えをしていなければならない、というのが私の持論です。私は父から「おなかが空いている時ほど贅沢なものを食べなさい」と教わりましたが、それもつきつめれば同じことです。つまり、常に心に余裕を持たねばならないということです。

さらに、コレクターもディーラーも作品を好きになる、惚れ込む、ということが必要です。本当に素晴らしい作品の場合には、日本での初鰹に際してのように女房を質に入れても、のような心意気が求められます。一方、逆に自分が惚れ込んだ作品を自分と同じように愛し、その素晴らしさを理解する人がその作品を欲しがる場合には、自分が購入した額とは関係なしに安く譲ることが出来ます。韓国には「女性は自分を好いてくれる人のために化粧をし、士は自分を認めてくれる人のために命を捧げる」という言葉があります。この「認めてくれる」というのは非常に大切なことで、古美術に関しても同じことが言えます。つまり、全く作品の真価を知らない人にはいくら金を積まれても譲りたくありません。それこそ豚に真珠です。しかし、金は無いけれど作品をよく理解している人にはただでも譲りたくなります。このように自分が愛する作品を同じように愛してくれる人に譲って喜んでもらうことの喜び、これがこの仕事の「味」なのです。この業界で仕事をする人は、「美しさ」だけでなく、この「味」、すなわち士の心にも通じていなければなりません。正しく「志」を持つということです。

作品の鑑定に際しては、たんに真偽の判定をするだけではなく、同じ偽物でもいつの時代のどんな偽物か、というところまで判断しなければなりません。弟子が描いた偽物なのか、あるいはずっと後の時代に素人が描いた偽物なのかを区別します。また、偽物と言っても種類も様々です。例えば、子供が5人いる場合、5人にそれぞれ同じ絵を分け与えようとして、本物を見て同じものを5枚描け、といって描かせたものや、ある家系に数百年もの間受け継がれてくるうち、当時は保存の技術が無いため作品が変質し、それを見て同じものを描け、と言って作らせたものなどがあります。

そのほか鑑定においては、紙や絹の質、墨、彩色の仕方などの年代が作者の年代と合っているかどうかなどについて分析し、一方、描かれている人々の衣裳や生活道具などに時代との矛盾が無いかどうかなども検討します。

一方、鑑定を頼まれて困ることもあります。それはその作品が偽物だった時です。所有している本人は当然本物だと信じ、あるいは祈るような思いで期待して、じっとこちらに熱い視線を送っている訳ですが、それが残念ながら全くの偽物で美術品として一文の価値も無いと判かった場合、いたたまれなくなります。その場合には「本物のような…、偽物のような…、一寸私には鑑別しかねます」と胡麻かして、そそくさとその場から逃げだしてしまいます。もちろん、相手が親しい友人の場合には正直に言って上げますが、そうでない場合は、わざわざ相手の期待を打ちのめして傷つけてまで本当のことを言う必要はないと思うからです。

ところで、韓国の絵画の魅力は一体何なのでしょう。一般に韓国の絵は「素朴で単純な味がある」とか「味噌鍋の香ばしい味がする」などと評されているようです。私は韓国画の魅力については「一見ポイントがずれているように見えながらもぴたりと正しい位置に収まっている」ところや「筆使いなど一見ばらばらでリズムがとれていないように見えながらも全体としてはよくバランスがとれている」ところを指摘したいと思います。つまり、大らかで自由奔放でありながら全体としては規格からはずれていないのです。この妙味が韓国絵画の一番の魅力でしょう。

この魅力はテクニックを使うなど意識して出せるものではありません。それは韓民族の意識構造に深く係わって、自然と滲み出てくるものです。例えば料理を一例にとり上げてみますと、日本料理は「割」であれ「烹」であれ、その多くは包丁さばきの正確さは見事なまでですが、しかしやや機械的で冷たい印象を外国人に与えがちです。これに対し、韓国の料理は手でちぎったり、揉んだりして作る料理が多く、盛り付けもどちらかと言えば無造作です。でも、それは柔らかく、あたたかく、心の余裕を感じさせてくれるのです。

これはほんの一例ですが、生活の様々な場面において、日本人は些細なことにまできめ細かに神経を使っている（無意識的なものも含めて）のに対し、韓国人は悪く云えば大雑把、良く言えば大らかであるように思われます。このような差が、きっと作風の違いとなって現われているのでしょう。

季刊 美のたより №116
平成8年8月29日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.